

浄

monthly
JODO

土

May 2003

5





昭和10年6月号



昭和10年7月号



昭和10年8月号



昭和10年11月号



昭和11年正月号



昭和11年2月号



昭和11年3月号



昭和11年4月号



昭和11年5月号



昭和11年6月号



昭和11年7月号



昭和11年9月号



昭和11年12月号



昭和12年新年号



昭和12年2月号



昭和12年3月号

寺院紀行

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

東京・花畑

実性寺

赤門前に並ぶ第二十九世松野大英住職
(左)と第二十八世松野大徹前住職。下
は実性寺本堂





実性寺本堂内陣



本尊は恵心僧都作の阿弥陀如来坐像



今は廃寺となった真言宗の蓮華寺
からきた不動明王

茶室「実相庵」(右上) 貴人口をそなえた「半床庵」の写して、表千家而妙齊家元の染筆がかかる。茶室「聴松軒」(左) 豊臣秀吉、聚楽台「残月亭」を写している。茶室「梅雄軒」(右下) 七疊敷で実性寺独特の逆勝手向こう切りの席



実性寺第二十九世松野大英住職



昭和五十年に作られた客殿正面の石庭。五つの石が須弥山、人、勢至菩薩、阿彌陀如来、観音菩薩をあらわしている





かつて三十本近くあった黒松は田んぼが無くなると同時に枯れてしまい、現在はこの一本だけとなった

日本で初めてチューリップを開発・栽培した鴨下金三翁の墓



日本で初めてクリーニング業を営んだ遠山由造の墓



古社、花畑の大鷲神社が酉の市のおもとだ

浄土

2003/5月号 目次

巻頭カラー 寺院紀行 東京・花畑 実性寺	撮影=タカオカ邦彦	1
随想 歌舞伎は歌う 法の道	真野龍海	6
表紙のことは	永井健策	19
寺院紀行 東京・花畑 実性寺	真山 剛	20
会いたい人 渡辺えり子②	関 容子	28
響流十方	小村正孝	34
「代替医療」という世界	井上朝雄	38
民話をたずねて	石崎敬子<松石川忠夫>	40
Jフォーラム		47
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	48
書評		51
編集後記		52



表紙題字=浄土門主 中村康隆 猊下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

随
想

歌舞伎は歌う

法の^の道

真野龍海

念仏踊りが歌舞伎の始め

本年は歌舞伎が慶長八（一六〇三）年に^{グイずも}出雲出身といわれる^{おくに}阿国が京都で念仏踊り、歌舞伎踊りを始めてから四百年ということです。

さて、この阿国の率いる女性舞踊一団は京都の四条河原や北野天神で、奔放などというか思いきった斬新な衣装と演出で歌舞伎を演じました。

私は以前から歌舞伎という文字を見て、なるほど歌と舞と伎（能・芸）の集大成か、よくできた言葉だなど思っていました。実は、もともとは「傾く」、「かぶく」という言葉であつたと知らされました。ちょうど今時の若者たちが、伝統、クラシック、おしきせ等から反発して自由奔放なスタイルの生き様、生活様式をとるような、いわば、斜めにものを見るというか、皮肉っぽい目で世間を見ながら、自己主張をするような演技であり、服装も常識はずれの奇抜さを誇らしげに演出したようです。

民衆は自分の鬱憤をはらしてくれるような自由な振る舞いに、驚喜して、大変な人気を集めました。このような歌舞伎の源を知ると歌舞伎の魅力も、なるほどと肯けることが多いのです。後代には権力への批判を歌舞伎で演出したりして、溜飲を下げる庶民のしたたかさも組み込んでいったのです。

阿国歌舞伎の発祥の地は、現在、知恩院などへ参拝される途中通過されることも多い場所です。四条大橋の東詰め、彼女らがその昔に活躍した場所近く、北の河原の傍に、阿国

の銅像がそれを記念して建てられています。私はいつも京都駅から知恩院へというと、多くのタクシーは加茂川の右岸の道を北上して、この銅像の所、南座を右折して行きます。その右折の時、左方にやや低く阿国の銅像の上部がちらりと見えます。太刀を帯びているのは女性男装の特徴、傾く、かぶくを誇示しているかのようです。

余談ながら、もう一つのちらりの眺めで私が楽しみな所があります。知恩院に行くのに、七条通りを右折、東大路を北上、八坂通りと直交する瞬間、右向けをすると、八坂の塔が、一瞬見えます。

観劇のきっかけ

さて、私はあるきっかけで、学生時代からなんとなく割合に歌舞伎を見ることが多くありました。研究ではなくて、見ている間は別世界にいろような楽しみに惹かれて今日に至っています。

そのきっかけは先代吉右衛門丈です。私は先の戦争中、学徒動員ということで、軍需工場へ出動しておりました。するとある時、丈から、働いている学生へ歌舞伎への御招待がありました。私は生まれて初めて、今の歌舞伎座の二階右奥あたりで見せてもらいました。それが、初代吉右衛門丈の一代の当たり役となった『二条城の清正』でした。

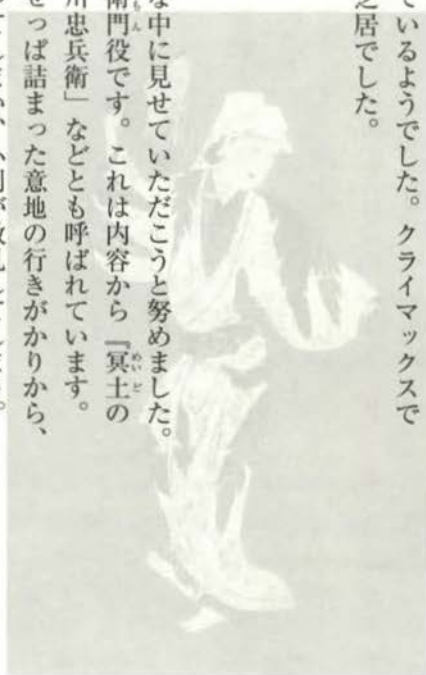
丈の清正は、敵陣ともいふべき京都は二条城で、家康と接見の主人秀頼公にびったり付き添い、身を以って守り通します。最後の場面は、その大任を無事果たして大坂城へ帰る船上です。舞台の上、船は大きく船首が観客席の方に向かって開いています。そこには、

秀頼と清正がいます。清正は主君秀頼を守り通せて感無量のていです。次第に居城の大坂城が見えて来るのを、秀頼の傍にあって望んでいるようすを演じています。帆が順風を孕んで、船も、ギーツときしり、安堵の叫びを挙げているようでした。クライマックスです。感激しました。誠忠というか丈にびったりのお芝居でした。

『恋飛脚大和往来』の父 孫右衛門

爾来、丈もご年輩でしたから、なるべく、御元氣な中に見せていたどころと努めました。印象に残る一つは『恋飛脚大和往来』の父親孫右衛門役です。これは内容から『冥土の飛脚』とも、また主人公の二人の名前を続けて「梅川忠兵衛」などとも呼ばれています。飛脚の忠兵衛馴染みの遊女が梅川です。忠兵衛は、せっぱ詰まった意地の行きがかりから、飛脚として届けるように預かった三百両の封印を切つてしまい、小判が散乱してしまふ。いわゆる「封印切り」です。こうなれば公金に手をつけた大罪です。

忠兵衛は破れかぶれと意地とから、梅川を連れ、故郷の大和の新口村へと逃げます。人目を忍び、父親（吉右衛門）に別れを告げに立ち寄ります。しかし、追っ手が近づいて来ます。二人は手を取りあって逃げて行きます。雪原の中を遠ざかる二人に、父はうろろうとうろたえながらも、抜け道の方を指さすかのように二人を気づかうのですが、吉右衛門は、その心情をきめ細かく演出します。うろろうする中に、草鞋の緒も切れますが、それ故に、よろめきながらも、早く行け、早く行けとの手の仕事で、子を思う親の気持ちを



よく表現していました。その親の思いに、つい泣けてきまして、隣の友人を見たら、やっぱり泣いていました。このような細かい心情を、手先を細かくふるわせながらの演出で人の心を魅了しました。

この二人の、いかなれば恋の道行きは、いずれは捕らえられて極刑が待っています。題して『冥土の飛脚』とは皮肉なことです。

この丈のデリケートな心情の表現では、次のような狂言、演目にも共通して見られました。

『籠釣瓶』のふられ役 次郎左右衛門など

『籠釣瓶』の大尽、佐野次郎左右衛門を丈が、花魁八つ橋を歌右衛門が演じて大変評判のようでした。次郎左右衛門が八つ橋に事情あつて愛想づかし、縁切りを言い渡されます。次郎左右衛門は「そりゃあんまり袖無かろうぜ」という有名な台詞で、切々と通いつめた哀情を述べながら、そのふられて口惜しい胸中を手先を細かに震わせながら演じていました。「ふられて帰える果報者」という有名な台詞もこの時と覚えていますが、私は未だにどういう意味か分らないでいます。たよりない歌舞伎愛好者ですね。

その他、『沼津』、『伊勢音頭恋寝刃』、『俊寛』等々です。吉右衛門丈はこの『浄土』に長く随筆を寄稿された吉田絃二郎さんと親好もありました。『二条城』は吉田さんの作です。吉田さんは法然上人のお芝居は書きたいが少し書きにくいと言っておられました。いつか、鼠が『法然上人全集』だけかじるんですが、鼠も法然上人が好きなんでしょうかね、と冗

談を言われていました。そして、「浄土」には、法然上人伝の一部分、盗賊耳四郎の小劇を連載されたこともありました。今この文を読まれたら苦笑されるでしょうか。聞くところでは梅原猛さんが法然上人のお芝居を構想されているとか、楽しみにしています。法然上人は劇的な方です。また、こういうものには多少色気というか、彩模様が無いとお芝居ではないような気がします。また、法然上人は

「かりそめの色のゆかりの恋にだに、会うには身をも惜しみやはする」と歌を詠まれ風情を解るお方ですから、充分に歌舞伎となる要素はありましょう。大いに期待したいと思います。

芝居の印象は強いものがあります。私は小学校の五年生くらいの時（昭和七、八年）に見た親鸞聖人のお芝居で「板敷山のどうかん」という言葉を覚えています。また、当時法然上人のお芝居では企画をされた寺西聴学という浄土宗の方というか、お名前をその時から覚えています。

歌舞伎・芝居の力

大学で仏教文学を講義する時、学生の理解しやすいように歌舞伎の話为例に引きながら話をしていましたら、副手の氏から、先生分かりませんよ、学生は歌舞伎を見てませんよ、と注意されました。

なるほど、今日、いわゆる歌舞伎が直接見られるのは、大都市にかぎられています。全国的には見る人は多くはないでしょう。東京は多く、国立演舞場、歌舞伎座、新橋演舞場、

その他で、毎月、上演されています。しかし、それ以外ではきわめて見る機会が少ないようです。阿国の銅像の近くの南座でも、歌舞伎の上演は、年末の顔見世くらいでしょう。

しかし、その大歌舞伎ではなく、中、小の歌舞伎類は、諸所で行われておるようで、地元の方々が、その文化の継承に努力されているようです。また、同時に上演される舞踊の類には長唄等の伴奏音楽があり、その音楽だけでも習い事として、町の女性が多く三味線等と共に習い言葉も文章も日常に歌っていたというか、耳に親しまれてきたものです。

ところで、特に今私が申し上げたいのは、歌舞伎の中の台詞や、歌の文言の中の仏教思想の数々であります。演技はとにかくとして、この仏教の言葉が多く歌舞伎の中には宝石のように鑲められてあります。その、お囃子はやしというか音楽部分には長唄、常磐津等々があつて、必ず劇の進行に伴つて上演されます。その歌詞は仏教概論と言つてもいいように、仏教の用語や表現がふくまれているものが多くあります。といっても、何でもかんでもという事はありませんが、よく聞かれるのは、諸行無常是生滅法生滅滅已寂滅為楽の言葉などあります。これらは、すでに中国の翻訳の時、漢文に訳された時、韻を踏んで、詞の形になつてゐることもあつて、語調よく、歌い込まれたものでありましょう。また、長唄等による舞踊も、歌舞伎のお芝居の幕を挟んで必ず上演され、日本などと共に、多く親しまれてもいます。その言葉を演技と共に何回となく聞いている中に、なんとなく意味も感じ取られ、日本人の、ファンの心にしみ込んできたと言えましょう。

歌舞伎発祥を見せる 瀬戸内寂聴『出雲の阿国』

さて話の発端に戻りますと、歌舞伎は阿国^{おくに}たちの念仏踊りが初めていうことであります。ただし、念仏踊り自体は、空也上人（一〇九七）が夙に京都に入り、次第に民衆の中にとけ込んで鉢を叩き鉦^{かね}を打ち鳴らしながらの念仏踊りを繰り広げていました。

また、時宗を始められた一遍上人（一二三九～一二八九）は、日本中に、お念仏のお札くばりと踊り念仏の遊行の旅を一生続けられました。この念仏踊りを受けて阿国の天衣無縫、四肢もあらわな女子舞踊団のレビューは、爆発的な人気を得ました。この阿国の阿も阿弥陀仏の阿と関連がありそうに思えます。この上演の最後は総踊り、念仏踊りとなってクライマックスとなったようであります。それは、これからお話しする本年一月初演の初春大歌舞伎での瀬戸内寂聴『出雲の阿国』に、とてもよく、明るく演出されていました。

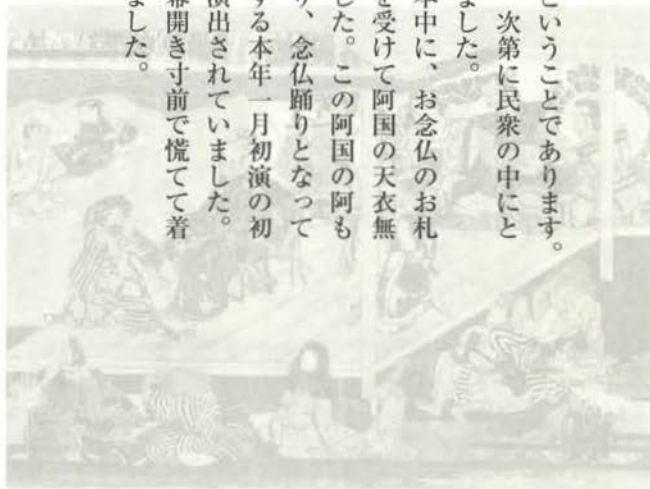
実は、私は何気なく正月気分で、歌舞伎の見物に出掛けました。幕開き寸前で慌てて着席し、初春らしい華やかな歌舞伎衆の群舞する舞台を楽しんできました。

やや落ち着いて改めて筋書きの文章を読んでいますと、

傾く阿国の伊達姿 変成男子は仏の教え

龍女にならって女人成仏 願うや阿国の男ぶり……

という文句が見られました。感心いたしました。一つには、これは正しく『法華経』の提婆品の内容を踏まえた文章であることであります。二つには、それがのろしの如く急激に



大人気を博しつつ世の中を驚かせた男子もたじろぐ女子集団の力の意味づけー哲学を説明していることでありました。

それで、どなたの脚本かと改めて見返してみると瀬戸内寂聴作で新作発表ということを知り、なるほどと感心しました。いうまでもなく瀬戸内さんは夙に天台宗の僧として仏教の、特に天台の教えを研鑽されて、講演に説法にと活躍されています。法然上人もそうでありましたが、天台宗では《法華経》を中心に仏教が再構築され、その中には念仏も含まれています。

阿国歌舞伎と《法華経》

《法華経》は大衆・人間性。女性に注目されたお経です。色々と、私たちに語りかけています。あまりに色々な特色があるので、人によっては中身が分からぬという方もあるくらいです。仏教の教えの中で《法華経》の特色を考えて見れば、分かりやすいと思います。分からないと言う方は、《法華経》だけ見ておられるからではないでしょうか。

そこで、改めて《法華経》をふり返って見ます。《法華経》のその特色の中で、断然**（おきり）**だっているのが、第十二提婆達多品（**ちくたはだたひん** 章）という部分で、仏教の伝統ある教えの歴史を百八十度転換するような教えが展開しています。

悪の提婆が前世で釈迦の師

そのあつと驚くようなものが二つあります。一つは「釈迦に提婆」といわれるくらいに、釈迦のような方にも親戚に悪の提婆がいる、どうにもならない因果がある、困ったものだ、という表現があります。しかし、《法華経》では、その悪の張本人として有名な提婆が、実は前世では釈迦に《法華経》を教えたのだという仏教の歴史を逆転させる提婆の話が説かれています。

提婆は仏教を開かれた釈迦に、その従兄弟でありながら、釈迦を亡き者にしようと悪巧みをしました。この悪の代表にされた提婆も、この《法華経》提婆達多品の教えによると、実は、前世では釈迦に《法華経》の法門を教えた仙人であつたと釈迦は述懐されているのです。この教えの奥底は、《法華経》の全てのものには仏性―佛の種―がある、悪人にも仏性がある、ということを、あつと驚くような言い方で説いているのです。

『平家物語』では、奈良の寺院、仏像、僧侶達を焼き、いわばこの提婆的逆罪をする結果となつた平家の総大将重衡も、法然上人のお念仏の教えで救われる心の中を、物語風に述べています。これも、人にはどんな人にも仏の要素（仏性）がある、むしろ、悪人凡夫こそ仏教に救われるべきだという法然上人の教えを裏づけるものでもあります。

女性成仏

もう一つは、「龍女成仏」といわれるものです。女性成仏と言えはいいものを、伝統保守的仏教に気兼ねしたのでしょうか、女性としないで、海龍王の娘、龍女と間接的な表現です。

お念仏の教えでも、女性の往生は、男子になってから往生するという經典の表現がありました。法然上人はそうしたものは、古典の經典研究ではされましたが、浄土宗の基礎の書として書かれた『選択本願念仏集』では全く男女の区別は説かれていません。むしろ法然上人といえは、女人往生を説かれたので有名です。

さて、『法華經』では、海龍王の娘が世尊の前に、忽然の間に男性となり（經文では「變成男子」と述べられている）、菩薩行を実現し仏となった。女子參政權がやっと近代になって認められたように、『法華經』までの仏教でも、比丘も比丘尼の教団もあったにもかかわらず、女子には五つの障害―五障があつて速やかな成仏が難儀と説かれてきました。どういう五障かといいますと、一は梵天王、二には帝釈、三には魔王、四には転輪聖王、五には仏身になれないという障害があつて、これを五障といいます。しかし、これも女子だけでなく男子だって困難です。しかし、この女性成仏を説く『法華經』は女性に元氣を与えました。

『出雲の阿国』

♪♪変成男子は仏の教え、龍女にならって女人成仏 願うや阿国の男ぶり…♪♪

さて、舞台の初めは一面に娘歌舞伎の群舞で、舞台後方はなにやら白い紗の幕で見えない。ところが、曲につれ、この歌を歌いつつ、今まで見えなかった紗幕の向こうの名古屋山三に照明が当たって次第に姿を現してくる。それは今は亡き阿国の愛人名古屋山三が「幽界」のあの世から姿を現すさまで、やがてみんなの明るくはつらつとした舞踊の中に入ってきて、いっしょに踊る。お数珠じゆしゆを持っています。バックの画は、手前に見える橋は三条の橋であろうか、遠くに見える山並みは比叡山の峰で、この舞台の場は賀茂の河原ということになります。

あの世、浄土から山三が来ての念仏踊りなのですが、舞台は減茶苦茶に底抜けに明るいのです。宝塚歌劇のレビューみたいなのです。それを見ている中に、この歌舞伎作品全体にある女性の自覚と主張と自己主張の明るさと誇りが感じられます。

それは、寂聴さんの脚本の故はもちろんです。申し上げたように、変男成仏の自信の下、今や女子も自己主張し、念仏もお囃子のように豪快にパフォーマンスして踊りまくる、清々しい演技でした。一本、変成男子の哲学と信念が入っている女歌舞伎を見事に楽しく見せてくれました。

終段、山三は花道のスッポン口から姿を消しあの世ー浄土ーへと戻る様を示し、後、舞

踊はいっそうのクライマックスとなり、胸の銅鼓を南無阿弥陀ー仏、南無阿弥陀ー仏と打ちならしつゝ、いざや かぶかん とてフィーナレー。

♪♪恋は思案の外じゃもの 仏さまも許させ給え 尽十方の無碍光は無明のやみを照らしつ 一念歡喜するひとを 必ず滅度にいたらしむ 南無阿弥陀仏 なむあみだぶつ
おん あみりた ていぜい から うん…♪♪

念仏踊りというものの活気に溢れ、明朗そのもの、女性信者の勝ち鬨きを聞く思いです。きつと、後々歌舞伎舞踊の演目となり、仏の教え、法の道を高らかに朗らかに歌いつつ上演されることになるでしょう。

『娘道成寺』、『湯殿の長兵衛』の挿入劇「金平法問評」、法然上人門下となる熊谷直実の出る『一谷嫩軍記』、『勸進帳』、また、歌舞伎といっしょに上演される舞踊の数々は、『娘道成寺』をはじめ、仏教の間答も見られます。機会あれば次回にご説明しましょう。

※（歌詞等資料については、平成一五年一月二日、歌舞伎座発行『歌舞伎四百年寿初春大歌舞伎』六、九頁を参考、歌詞は引用。

命

心
象
書
道永
井
健
策

命って何だろうと私は考えている。
命って色々な書き方で、色々なカタチに
見えて来る。
そして書いている内にどんどんと顔と
いう文字になって来ました。

命っていう文字。

じっと書いている内に色々な顔に
見えてくるから不思議です。

(ながいけんさく)

昭和20年群馬県生まれ。中央大学法学部卒業後、読売広告社に入社。
企画セクションに配属され16年在籍した後、自動販売機製造メー
カーのサンデンに転職。販売企画の仕事を16年続け、平成11年
に独立。会社を設立し、新規事業に取り組んでいる。趣味で始めた
「心象書道」が趣味の世界を超え、展覧会を開くまでになっている。

寺院紀行

東京・花畑

実性寺

撮影／タカオカ邦彦

文／真山 剛



徳川家からの許可で建てられた朱塗りの山門

品々、そして本尊の光背までも失ってしまった。

また、境内もかつての寺領の大半が農地だったこともあり、農地解放でそのすべて失っている。

しかし、この実性寺には火災を逃れた貴重な墓がいくつも残っている。大変興味深い墓なので、どんな人のお墓かを列記してみよう。

油問屋 滝沢富右衛門

算学者 金杉清三郎

西南戦争徴兵者 小林亀太郎

儒学者 牧野隆幸

西洋洗濯(クリーニング)業祖 遠山由蔵

チューリップの開発・栽培者 鴨下金三

大鷲神社の宮司(ここ花畑が全国の大鷲神社のもと)

ここに年代順に列記した人たちは江戸時代の半ばから明治、大正にかけての人たちだが、その誰もがいわゆる“人物”である。

最初の油問屋滝沢富右衛門は、商売が隆盛を極め、油になる前の菜種が道端に落ち、一面菜の花で埋まったというエピソードがある。花畑という地名もこの菜の花からか、と思ったが、実際は花又村が花畑村に変わったので、菜の花畑が直接地名になったわけではないそうだ。それでも花又と花の字の付く名前なのは、こうしたエピソードと無縁ではないからに違いない。



静かな佇まいの待合い



茶庭の蹲(つくばい)

東京北部、もうすこし行くと埼玉との県境となる毛長堀が流れる足立区花畑に実性寺がある。かつては小高い丘で黒松に囲まれていた名刹で、その名残が墓地の中に一本残る大きな黒松と、院号の林松院にしのばれる。

創建は延徳元（一四八九）年で、開山上人は光蓮社天譽了聞大僧正。信濃国の出身で、禪を学び雲水として全国行脚中に増上寺第四世光岡上人に帰依、弟子入りをした。その後、浄土宗の奥妙を究めこの実性寺を開き、三年後には師の後を継ぎ増上寺の第五世となる。増上寺を退いた後には埼玉岩槻に浄安寺を建立するなど、江戸以前の名僧の一人である。

そして江戸時代には、開山上人と徳川家との縁もあり、寺領が広がり、日光裏街道だった流山街道沿いの実性寺には、徳川二代、三代将軍が鷹狩りの時などに立ち寄り、赤門建立の許しを得ている。

七年前の御忌の唱導師を務めたのをきっかけに、弟子であり長男でもある現第二十九世松野大英住職にその座を譲った松野大徹前住職はこういう。

「火事で寺宝はすべて焼失していますので、この朱塗りの山門がこの寺の顔というわけです。」

明治初頭の大火をくぐり抜けたのは、本尊の阿弥陀如来坐像と絶対秘仏の仏さまだけ。残念ながら赤門や過去帳、徳川家から賜った



山門の実性寺額と本堂

西南戦争では珍しく徴兵され、明治十年に二十二歳で戦死した小林亀太郎の墓を挟んで、算学者と儒学者がいる。算学者、金杉清三郎は木挽き職人から、東武藏の算学の第一人者になった人で、多くの門人がいた。儒学者、牧野隆幸も花又で牧野塾を開き多くの弟子を育て、その弟子たちが師の為に筆子塚を実性寺に建てた。その塚は区の登録文化財になっている。

そして「日本初」とつく二人が続く。明治元年に渡米、クリーニング業を修得し帰国、横浜に西洋洗濯第一号店を開いた遠山由造。そして大正時代の温室栽培の先駆者でチューリップでは日本初の開発と栽培に成功した鴨下金三だ。この二人の墓には今でも昔ながらのクリーニング屋さんや、北陸のチューリップ栽培農家の方がお参りに来られるという。業界の祖はいまも大切にされている。ちなみにチューリップは足立区の花でもある。

そして、毎年十一月に商売繁盛を祈願するお西さまの本社にあたるのが、ここ花畑の大鷲神社で、創建が十二代天皇四十年（一一〇）といわれている古社だが、その宮司の代々の墓がある。

こうしてみると実に様々な人たちがこの実性寺に眠っているが、そこに共通するのは、実に勉強熱心であったり、進取の精神旺盛な人たちということである。

確かに足立区には郷土史にかかわる書籍や、郷土史ニュースがた



東京と埼玉の境を流れる毛長堀

くさんある。東京は徳川家康の江戸開府にともなって急激に開けたが、今の足立区あたりはもともと高台で、古い板碑などの出土品も多い。そういう意味では歴史ある地域であり、郷土史ニュースに史跡の紹介はもちろん、実性寺に眠るこうした先達もしばしば紹介されている。

その記事のひとつに「文化を支えた寺院群」の見出しで実性寺に関する記述があった。牧野隆幸の弟子に、後に寺子屋を開いた者がたくさんいると紹介され、花畑が足立区の中でも最初に開けた地域で、学問盛んな土地柄であることが記されている。

寺院を中心にいくつもの塾が開かれ、そこで多くの生徒たちが学び、その中から勉学を志す者、夢を抱いて海外に出る者と、いろいろな若者がいたに違いない。そして功成り名を遂げ、かつ、その子孫にも恵まれた者が、こうして実性寺に今もその足跡を残している。

さて、こうした花畑ならではの实性寺とは違う、もう一つの顔が実性寺にはある。それは茶道である。

「『茶の究極の目的は茶室という狭い空間に、この世で行き着ける極楽を作り出すこと』。これは私の尊敬する茶人の言葉ですが、茶道の求めるものと仏道の求めるものは本来、限りなく近いものではないでしょうか」

暁月山林松院実性寺第二十九世松野大英住職は、長時間の取材に



住職も見なかったことがないという秘仏の内仏

もかわらず端座したままこう話してくれた。

「朝起きて、湯を沸かし、茶を入れ、仏に供え、他人に施し、我も飲む」これは茶の湯を茶道に変えた千利休の言葉だが、利休はさらにこうも言っている。「我々茶人は先徳（僧侶）のまねをしているのだ」と。

茶道の歴史を繙く誌面はないが、中国から伝わってきたお茶は、それまでの大部屋から四畳半という茶室で楽しむようになったこと、そして禅思想と結びつくことで大きな変化をとげた。さらに千利休によって茶道は未曾有の興隆期を迎えたが、この頃は時の権力者である武士が茶を楽しむ、茶人の応援者となっていた。

こうした中で茶は武士道、仏道と切っても切れないものとなり、まさに生や死を底流にした真剣勝負の場となっていた。それが時代の流れとともに大きく変化し、現在に至っているが、その節目は明治維新にあったという。

武家社会の崩壊は茶人にとつては、スポンサーという強力な後ろ盾を失うことを意味した。それ故、いやがおうでも商業主義的な方向を取らざるを得なかった。

いまでこそお茶というと女性のたしなみのように言われるが、明治までは男性のもので、女性が茶席に姿を見せることはなかった。また、お茶につきもののお菓子だが、古くは、砂糖をひいた上にゆで卵をのせたり、きしめんにすこしのあんこを乗せたもので、しか



油問屋を営んだ滝沢富右衛門の墓



実性寺の開基、斉田左衛門頼庸公の墓。法号は、実性院殿雲山曉空大居士

もそうした物を口にした後には必ず水で口をゆすぎ、それからお茶を飲むそうだ。

住職から話を聞くほど、現在の茶道が本来の茶道とは違って来ていることに驚かされる。とはいえ、これも時代の流れや環境の変化によるもので致し方ないことではある。

そうした中で、今も茶道の原点を追い求めている人たちもいる。

松野住職もその一人だが、松野住職がその集まりと縁を持ったのはもう三十年も前のことだという。その集まりは名前も規則もない集まりで、流儀を乗り越え、真剣勝負の場としての茶をたてている。

祝、仏事、節句といったテーマのもと、自分の器量でいかに相手の心を感じ取ることができるか、限られた空間をいかに悟りの境地に変えられるか。それを、五十代から八十代の四十〜五十人の男性が追い求めているのである。

「まだあと、二十年や三十年では茶室に極楽を作り出すまでにはいかないでしょうが、真剣勝負の場で本来の茶の世界を求めることは、僧侶としての活動ともつながっています。本物の茶道を通して寺院の役割、僧侶の使命をいつも意識させられますが、大事なことだと思っています。」

こう語る松野住職とお茶の出会いは一冊の本からだった。明治時代の思想家であり、また美術指導者であった岡倉天心の代表的著書



大蔵神社の宮司である濱中家の墓



儒学者、牧野隆幸の筆子塚

『The Book of The Tea』がある。この本は明治三十九年にニューヨークで出版された天心美学の書で、茶に託して日本の伝統文化の優越性を述べた本である。松野住職はこれを高校生の時に読み、茶への興味を募らせた。それゆえ、茶の精神についての本だけに流儀や細かい作法にこだわるお茶には興味がわかず、近隣の茶道教室や茶道部などには入らなかった。松野住職が選んだのは曹洞宗の寺院、正法庵という尼寺の茶所だった。

時に十六歳。週に一回、十五年通ったが、それが松野住職の茶の原点で、もともと日本文化や工芸品、静かな世界が好きだった住職だけに、先代も、他宗の僧侶の弟子になることを何も言わず許している。それどころか、後年、自分の弟子であり、息子である現住職に弟子入りをしている。

そして、先代の頃からあった茶室らしき部屋を、茶庭とともに好みの茶室に改装、そこを教場として、道場を開いている。また若手能楽師にも手ほどきをするなど、茶は住職の生活の一部になっている。

湯を沸かし、茶をいれ、仏に供え、他人に施し、我也飲む。この茶の精神はまさに仏の教えにも結びつく。

「本物を伝えたい」これが松野住職の思いだが、本物の茶を追い求めることがそのまま仏道修行になっているのである。

(ルポライター)



大徳前住職(左)と大英住職。後ろが客殿入り口

連載

会いたい人
関 容子

渡辺
えり子
さん
②



撮影／タカオカ邦彦

高校一年のときに「演劇の道を志す」と固く心に決めたえり子さんは、学業はそっちのけ、徹底して演劇部活動に専心した。

「風邪をひいて四十度の熱を出しても、部活にだけは行ってましたね。先生に見つかって、お前、今日欠席だったろ？」と言われると、ええ、クラブは休むわけにいかないもので、って。また、数学の先生から、一日十五分でもいいから、数学の勉強もしてくれよ、と言われて、いえ、それはできませんね、って（笑）。

進学校なので三年生になると部活はやめなきゃいけないので、一、二年生だけなんです、それでも五十人はいて大道具小道具衣裳照明全部自分たちでやりました。女子高なので上演できる演目が限られるでしょ。男役を宝塚調で演じるのはいやだし。で、サマになるのは児童劇かアングラ。シュールな話なら男も女も性別を越えたものになるだろうし……ってことになりました」

選んだ演目はまずメーテルリンクの『青い

鳥』、翌年が寺山修司の『犬神』。しかしここに至るには、えり子さんにしか思いつかないような奇抜な発想があった。

「往復ハガキを二百枚くらい用意して、東京の二百の劇団に出したんです。私たちは山形の女子高演劇部ですが、女子だけでできる戯曲があつたら教えてください、って。返事が何枚か来て、劇団四季と手織座と人形劇団ブークとかです。たしか劇団四季が『青い鳥』はどうか、って言うてきたんだと思います。

ブークは、われわれは人形劇団なので思いつかないけど、という返事。でも有難いなと思って、この間も講師頼まれたとき、断われなかった（笑）」

えり子さんの役は『青い鳥』ではお祖母さんとお母さん。『犬神』のときはある場面のためにわざわざ生まれた村の山王まで行き、御詠歌を教えてもらって出演した。

「高校生演劇だからと言って半端じゃなかったですよ。学校の先生には反対されましたけ



34歳（1989年）
劇団300第21回公演『踊る砂の伝説』

ど、一枚九百円のチケットを自分たちで売って、県民会館の千五百席を『青い鳥』で満席にしちゃったんですね。『犬神』のときも、何だかわけわかんなかったけど面白かった、って好評でしたし」

二つの公演の間には学校の体育館で『高等学校数学2B』（高校生演劇）を上演、これはえり子さんが演出を担当した。学校にあった材木を集めて六角形の八百屋（斜め）舞台をみんなで作り、衣裳は抽象的にして、転んだり滑ったり、前衛劇ふう演出だった。

「のちに上京して、ピーター・ブルック演出の『真夏の夜の夢』を観たとき、あれ、私の真似してる！ って思いましたよ（笑）。すごい斬新なこと考えたつもりだったのに……」

でもあのころのクラブ仲間とは、喧嘩して泣きながら演劇を論じ合いましたけど、それでどんどん仲よくなっていきましたね。今の劇団の人たちってすごい表面的なつきあい方ですよ。昔の子ってどうしてあんなに燃えた

のか。今、一緒に芝居がしたいですね」

三年生になり、部活動ができなくなったえり子さんは、男子校の生徒たちが結成していたフォークグループに参加することにした。

「リーダーは日大山形高校の生徒で、山形市の八文字屋という大きな老舗の本屋さんの次男坊。その家で毎日練習するんですけど、私たち演劇クラブの女生徒が三人入ったものだから。大人は自分たちの尺度で物を計りますし、不純だと言われてブラックリストに入れられたんです。いつも音楽の話ばかりで、ただ練習をしていただけなのに、男女が一緒にいるとヘンな眼で見るとね。私は親の躰けが厳しくて、高校三年で喫茶店にも初めて入ったくらいなんです。そこでジャズを初めて聞いて、すごく興奮して好きになりました。子供のころの私は父親が聴いていたレコードの『新世界』とか『冬の旅』とかのクラシックばかり。中学のときジュリー（沢田

研二」の大ファンになって、初めてお小遣いをためて買ったのがタイガースの「ヒューマン・ルネッサンス」というLPレコードなんですよ」

えりさんはファンのなり方にしても、通り一ぺんではすまない。ジュリーが好きなのは全部勉強しよう、という情熱に駆られ、曲名にあるカンタータとかレクイエムとかプレリユードとかいう音楽用語を、図書館の楽典で次々と調べて学んでいた。

「つまりジュリーが先生みたいなもの（笑）。彼のファンであることによって、音楽の世界がどんどん広がって行っただけです。」

フォー・グループに入ったのも、もしフオークジャンボリーのコンテストに三位までに入賞すれば、東京で言うところと武道館みたいな山形県営体育館で、『赤い鳥』とか『ガロ』といった当時人気グループが来る公演の前座でその三チームが歌える。それを狙おう、というんで作られたグループだったんですよ。

だから、大人から誤解されるほど熱心に練習して、その結果二位になって、念願の前座出演を果しました」

学校のほうは音大や美大を受験するコースに入って音楽の基礎を学び、またモダンバレエのレッスンを受けて体を鍛えた。何をやっても総て演劇への道に通じているところがすごい。

「親は私が芝居の道に進むのは大反対だったんです。高校の三年間も毎日喧嘩してました。今思うと父親も大学のころに演劇をやってるんです。それで演劇は雲をつかむような行為だということを実感したらしくて、可愛い娘にはさせたくなかったんでしよう。じゃあ娘はいないと思うってくれ、と言うと、それなら、劇団には入らないで、せめて演劇学校に入れ、って言われた。学校なら卒業すれば帰ってくる、と思ったんでしようね」

図書館で学校案内を調べ、「舞台芸術学院」



35歳（1990年）
母校山形第六小学校での講演会

を受験することにして上京。心配して母親がついてきてくれたが、何か悪いことでもするような、ひっそりとした旅立ちだった。

「試験の翌日合格の発表を見て、母親が机と本箱と炬燵と電気釜を買ってくれましたけど、スプーンと箸なんかセルロイド製なんです。どうせ寂しくなつてすぐ戻るのにもつたないから、つて。部屋は、弟の同級生のお母さんの妹が板橋にいて、その人が下赤塚の三畳間を探してくれました。家賃が五千円。小さな暮らしとガス台がついてるだけ。それでも一人暮しできるのがとっても嬉しかったですね」

この「舞芸」には三年間在籍した。終りの一年間は有志の学生が自主的に作った専修科。ここでもえり子さんの活躍ぶりはユニークだ。「重宝がられて、ミュージカル科の美術プラン、衣裳プラン、脚本も書きました。二年の卒業公演はシェイクスピアの『十二夜』で、私は道化をやったんですけど、それもロックのバンドの生演奏つき。オリジナルの作詞作曲でしたからね。」

そのとき演劇雑誌みたいなのを作って会場で売ったんですよ。私が編集長で、唐十郎さん、別役実さん、清水邦夫さん、つかこうへいさんにインタビューしちゃいました。『アンドロギヌス……』両性具有のことをいろいろ調べて特集組んだので、今思っても画期的だなと思いますね。広告も自分たちで一件一万円で行って、イラストまで描いて載せたのですごく喜ばれた。だから赤字になりませんでした。」

えり子さんは小学生のころ手作りの「渡辺絵本 アンヌ」を出して友達の間で大人気だった。現在は劇作家協会副会長だが、会報誌「卜書」の編集長も兼ねている。

「子供のころからやっていることは一つも変わらないような気がします（笑）。

舞芸のころに小劇場系のシニールな芝居を勉強するようになったのは、演技指導の兼八先生の影響だと思います。赤テント黒テント早稲田小劇場とかを観て歩きました。初めて観たのが唐十郎さんの『盲導犬』。蜷川幸雄

さんの演出で、石橋蓮二さん蟹江敬三さん緑魔子さん、それに桃井かおりさんもちよっと出てました。新宿文化センターで映画が終ったあとの九時ごろから長蛇の列に並んで観たのですが内容も役者も演出もすごく面白くて、こういう芝居がしたい！ と思いました。高校時代に山形で観てたいわゆる新劇は、選りすぐりの作品ばかりだったんで感動したんですけど、たとえば奈良岡朋子さんの『チェーホフへの手紙』とか、西田敏行さんがデヴィューした『写楽考』とか。でも東京で観る新劇はあんまり面白くなって、あれ？ これなら脚本で読んだほうがいいんじゃない？ っていう平凡な演出のばっかりになっちゃってたんです」

両親からの仕送り、月に三万円と、アルバイトをして得たお金は、ほとんどが芝居と映画の切符代で消えてしまった。

「おでん屋さんのやまとという店でもバイトしてたんで、そのママが毎回舞芸の芝居を観に来てくれて、今度何か近松門左衛門の作品を脚色すれば？ って言うんです。それで「心

中天網島」を脚色して、楽器も自分たちで演奏して、黒子の衣裳着て人形劇みたいにして上演したらすごく好評で。あとで劇団青俳の人から、あれを書いた学生がほしい、と言われて、私は舞芸卒業後、青俳の演出部に入ってます」

劇団青俳に一年間在籍している間に十三本の演出をしたし、青俳の役者と八年間にも及ぶ恋もした。

「一年間でやめたのは、青俳から給料を月に三万円もらってて、あとで聞くと一本にスタッフでついたギャラが一万円。あとは私の借金だつて言われた。いればいるほど借金が増えるなんて、と頭に来てやめました。

恋愛のほうは……私は惚れっぽいほうで、四十歳で結婚するまでには、自分一人だと思いついてたら相手は私の芝居が好きだったとか、話が面白かったからとか、そんなのがいっぱいありました。でもその気持を題材にして、何本も芝居を作りましたから、元は取ってますね（笑）」



醍醐だいごの上味じょうみ、
翻ほんじて毒薬となる。

(仏教ことわざ)

最上のもので、すばらしく美味なものであっても、
使い方、味わい方次第では、毒薬にもなる。

ラッキー、便利、簡単…。

日本人の防衛意識欠如が指摘されることの多い昨今である。つい先頃までは、中東を舞台に戦いが行われていたし、私たちのすぐ隣国の動きも不穏の様相を呈しているし、たしかにそうした指摘を受ける要素はいくらでもある。

その意識の欠如を探っていくと、日本史という観点からはいわゆる「元寇」でのラッキーに辿りつく、そんな見方があるという。元寇とは、一二七四(文永一一)年と一二八一(弘安四)年の二度にわたる、モンゴルによる日本襲来事件のことである。しかし、モンゴルは突如の暴風雨に見舞われ二度とも撤退している。当時、世界屈指の武力を持っていたモンゴルが相手とあれば、これは日本にとってラッキーだったとするのは正しい見方だろう。このラッキーが、大きな要因というのだ。

元寇という歴史的事件を引き合いに出すのは必ずしも当を得ていないかもしれないが、だいたい、自分の側の利となること、なったことは、それ以降の自分にとってステップとしての役割をもつ場合もあれば、感覚を鈍らせる作用も併せ持っている。要は、それを経験した側、与えられた側の受け取り方、活用の仕方であると思うのだが……。こうした切り口から国防論を展開するのがこの稿の目

的ではない。さらに言えば、筆者は決して好戦的性格の持ち主ではないと認識している。念のため)

「骨なし魚」が流行っているらしい。何だろうと思いきや、食べやすいように、骨をソックリ取り除いてから市場に出される魚のことだとか。ていねいに身を開き、背骨はじめ大骨から小骨に至るまで、ピンセットで取り、身を復元するのだという。当初は患者さんでも安心して食べられるようにと病院食用に開発(?)されたものだったが、徐々に広まりを見せ、最近では一般家庭にも普及しつつあるのだそうだ。スーパーには「骨なし魚コーナー」まで登場しているとも聞く。しかし「便利な世の中になったものだ」との感想をすぐに抱くのは危険であると、そう思っってしまった筆者はひねくれものだろうか。

たしかに病院などではいいだろう。学校の給食でも採用されているのは、なるほど子どもたちのことを考えてのことであろう。だが、手放して喜んでいていいのだろうか。魚は骨のある生き物である。食べるにあたってそれを取り除くのは基本的に当たり前だが、本来それは、食べる本人がすべき作業のはずである。乳幼児には無

理としても、少しずつでも慣れさせる義務が、大人にはないだろうか。安易に便利なものを与えてしまうのは、安心のためとはいいながら、実は大人の責任回避との指摘を受けはしないだろうか。

テレビでリポーターが、居酒屋でほろ酔い気分のお父さんに意見を求めると、「魚なんか骨を取りながら食べてこそウマイんだよ。味気ないな、そんなの」との答え。「ウーン、ごもつとも」などと妙に納得していると「実はこうした声に応え、近頃は小骨だけを除いて背骨を残した骨なし魚が登場しています」とリポーター氏。「……」である。

現代の生活、筆者自身、大いに「利」を得ている以上、今さら便利グッズ、快適環境をどうのこうのと批評する気もなければ、そもそもその権利もない。しかし、ラッキー、便利、簡単といった「おいしい」ことをあたりまえとばかり捉えていると、思わぬ落とし穴に出くわさないとは限らない。

教育のあり方、自身の成長、心のコントロール……。ある意味、あらゆる面においてそれが難しくなっているような感を受ける時代ではある。

(小村 正孝)

エコロジカルで より自然な療法

CAMU Net / 代替医療利用者ネットワーク

井上朝雄

代替医療とは、わたしたちが通常医院で受けている、いわゆる近代西洋医学以外の医学や療法の総称であり、代替医療という名称はオルタナティブ・メディスンという英語を翻訳したものだ、といいました。つまり、そもそもが欧米からきた考え方です。

その代表のひとつが鍼灸や漢方薬などの東洋医学なのですが、わたしたちが活動を始めた五年前にはこの代替医療ということば自体がまだ耳新しく、実際、日本の東洋医学関係者など、「長い歴史を持つわれわれの医療が、どうしてダイガエなんだ」と怒ったほどでした。それは日本語の「代替」にはどこか「間に合わせ」「質は落ちるが仕方なく使うもの」というようなネガティブなニュア

ンスがあるからですが、英語のオルタナティブももとは似たようなニュアンスだったそうです。

ところが欧米では、一九六〇年代後半から七〇年代前半にかけて若者を中心に「対抗文化」という大きな運動が巻き起こり、その中で「代替」ということばの意味合いが変わっていきました。対抗文化は、日本ではおおむね「ヒッピー文化」程度の理解として終わってしまいましたが、そうではなく、ひとことで言うなら「いまの世界のあり方に対する異議申し立て」の運動であり、「代替」は、「間に合わせ」ではなく「既存のものに取って代わる」というような強いことばとして、医療に限らずさまざまな分野で積極的に使われるようになっていったのです。

それにしても、今日振り返って驚くのは、その運動の中から提示された問題意識やメッセージが、三十年たつたいま、わたしたちの誰にとっても身近でリアルなものになっていることです。その最たるものは「環境」で、いまわたしたちが普通に使っている「エコロジー」ということは、そもそもは単に「生態学」という意味だったのが、対抗文化の中で「地球もひとつの生命体である」という考え方が提唱され、そこから環境を考え、地球と共存した生き方を、というエコロジー運動が広がっていったのでした。

しかし、当時の日本を例に取れば高度経済成長期のピーク時であり、一方で公害問題が大きくなっていったにも関わらず、イケイケの時代であって、「地球も生命体」というメッセージがどれほどの人に届いたか。いや、届いたとしても、多くの人には寝言程度のものではなかったでしょうか。それがいまや、地球環境がもはや待ったなしの危機的状況にあることを誰もが知っているし、二酸化炭素排出削減に非協力的なアメリカにみんなが怒っています。

収獲効率だけを追求する化学肥料や農業に対する危機

からオーガニック——有機農業や有機食材・有機素材への強い志向もこの対抗文化の中で生まれています。いまや食の安全の問題と、環境という二つの観点から、「有機」ということもわたしたちの身近なテーマになっています。

同じように、近代医学や医療に対する異議申し立てとして出てきたのが、代替医療です。つまり、ここにおける「代替」ということばの意味は、近代医学とは依って立つ考え方が違う医学・医療ということであり、近代医学が切り捨てた近代的でない、つまり今日の科学では証明できない伝統的な医療や民間医療などを積極的に見直す、というものでした。

そこにおいて、代替医療ということばには、近代医学に代わるものというだけでなく、環境問題や有機農業・有機素材と同様、「よりエコロジカルな医療」「より身心に自然な医療」というニュアンスも付与されています。

そういわれてみると、鍼灸や漢方薬などからだの気の流れを調整して治癒に導く東洋医学は、たしかにエコロジカルだし、身心に自然な療法で、だから代替医療の仲間とされているのです。

民話

をたずねて

連載

椀を貸す洞穴

石崎敬子



絵 石川忠夫

むかし、むかし。

ある村の境にでっかい岩があつたんだと。その岩には洞穴があつて、お客があるという前の日に、

「洞穴様、洞穴様、お膳とお碗を十人前お貸しくだされ」

と、頼んでおくと、次の朝には、ちゃんと洞穴の前に揃つておるんだと。その膳と碗というたら、金粉で飾つた朱塗りで、それはまあ、立派であつたと。

そんなわけで、村の衆は、お客があるたびに、洞穴様にお頼みしておつたと。そして、使つた後は、ひとつひとつ丁寧に洗い、きれいに拭きあげて、洞穴へ持つていき、

「ありがとうございます」

と、お礼を言い、返しておつたと。

ある時、村の若者が嫁さんをもらうことになつたと。そこで、若者は、

「洞穴様、洞穴様、おら、嫁をもらうことになつた。お膳とお碗を五十人ぶん貸してくだされ」

とお願いしたと。

次の朝、若者は一番鶏の鳴くのを待ちかねて、洞穴へとんで行き、膳と椀を借りてきたと。それから、三日三晩、婚礼の祝いが続いたと。婚礼の騒ぎも終わった四日目の朝、若者は嫁さんと膳と椀を洗い、きれいに拭きあげておったと。見れば見るほど美しく、嫁さんは思わず、

「これ全部、おら達のものだったらなあ」と、つぶやいたと。

「うん、そうじゃな」

若者も、返すのが惜しくなってきたと。二人は、しばらくの間、膳と椀を眺めておったが、とうとう戸棚の奥にしまいこんだ。

さて、それからというもの、村の衆が、洞穴様にどんなに頼んでも、何一つ出てこんかったと。

「こりや、洞穴さまに返さんかった者がおるにちがいない。いったい誰じゃろ」

村の衆は口々にそう言い、困っておったが、二人は知らん顔して

おったと。

やがて、若者と嫁の間に、まるまるとした可愛い男の子が生まれた。二人は、それは大事に育てておったが、どうしたことが、その子は、二歳になっても這うばかりで、いっこうに歩くことができません。他の子が走りまわる年頃になっても、這うことしかできません。

「どうしたことじゃろ」

と様とかか様は、あちこちの神社にお祈りしてみたり、評判の医者にもせたりしたが、やっぱり這うばかり。どうとう、その子も十歳になったと。

その年は、たいそう米ができたから、これでまた、いい医者にみてもらえると、二人して喜んで、米俵をこしらえておったと。

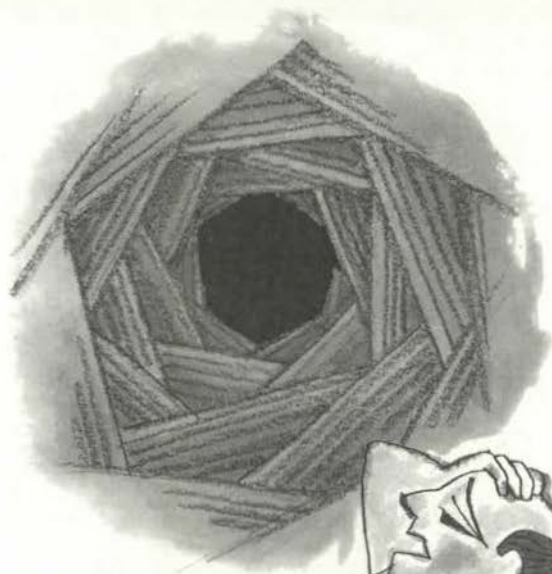
すると、子どもが這ってきて、米俵につかまり、すつと立ち上がったと。

「ありや、立った、立った」

二人がたまげておると、子どもは、両手に一俵ずつ米俵を掴み、はいっと持ち上げた。そして、ものも言わず、しゃかしゃかと歩

民話

をたずねて



OSHI
KAWA

き出し、庭から出ていったと。

「これ、どうする気じゃ」

「あぶない。どこへ行くつもりじゃ」

とと様とかか様は、これはたいへんと、子どもの後を追いかけたと。ところが、その早いこと。米俵を二つも抱え上げておるというのに、その子はごんごん歩いて行くんだと。二人は息切らせて追いかけて、やっとのこと追いついたと。そこは、村境の洞穴の前だったと。そして、子どもは、洞穴の中にすーっと入って行ったと。

とと様とかか様も、洞穴に駆け込んだと。中は真つ暗で、なんにも見えん。それでも、ずんずん進んでいくと、目の前がぱつと明るくなったと。見ると、そこは洞穴の入り口であつたと。

「こんなことがあつてたまるか」

と、ななと中に入ってみても、やっぱりもとの入り口に戻ってしまふ。

「いったいどうなっておるんじゃ」

二人には、さっぱり訳がわからん。へなへなとその場に座り込んでしまった。

すると、洞穴の中から、ぶつぶつと話し声が聞こえてきたと。

「それ、米二俵持ってきたぞ」

「よしよし。これで、もとは取り戻したな」

それを聞いて、とと様とかか様は十年も前のことを思い出したと。

「そうか、借りたもんを返さなんだからか」

二人は、転げるようにして家に帰り、戸棚の奥にしまい込んであったお膳とお碗を持っていき、

「洞穴さま、洞穴さま。お借りしたお膳とお碗を、この通りお返しします。どうか、わしらの子どもを返して下され」

と、泣いて詫びたんだと。

けれど、子どもは戻ってこず、洞穴の前に置いたお膳とお碗は、そのうちに腐ってしもつたと。

FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

FORUM
浄土の広場

〔特選〕

玄関の軒が寧しと燕来る

片桐てい女

●玄関

燕は毎年同じ家に巢を組むというが、これは安心できるからだろう。この句の燕も去年の玄関の軒を、当然のように今年も借りたのである。とりたてて珍しい句ではないが、安心して読めよう。

〔佳作〕

桜草玄関までの鉢の数

河合富美枝

玄関に鉢で留めある梅便り

野島 弘毅

雛褒めて辞す玄関の大時計

石原 新

●料理

〔特選〕

船頭の自慢の料理花見舟

野島

葵

屋形船、あるいはそれに類するものだろう。評価の料理か、自慢の品として出されたものか。とにかく大いに酒がすすみ、話がはかど

〈特選〉

海女の葬大鍋で炊くあおき汁

増田 信子

●自由題

るということ間違いない。花見舟と言ったつて、今はもう花より料理だ。

〈佳作〉 夏料理五十路の妻のかくし味

大場 清

雛の夜の母の手料理穴子鮎

河合富美枝

一献に母を真似たる芹料理

佐藤 まり

親戚から隣近所に至るまで寄ってきて、飲み食いの用意をする。そういう風習が残っているのだろう。大鍋で炊く味噌汁には、その土地のあおさがふんだんに入っている。用意しながら、男はすこし酔っている。

〈佳作〉 雲ひとつなき冬滝の男振り

中島富士子

握りいる数珠ぎしぎしと冬の月

井村 善也

茶畑を丸く映せし道路鏡

浜口 佳春



自由題

◎季語ではありません

浄土誌上句会のお知らせ

参加作品.....編集部選

玄関

玄関に孫を待ち居るて葛蒲あり

風の神玄関叩き五月来る

一句だに成さぬ玄関初燕

櫻草玄関まての鉢の数

玄関に春の足音孫五才

玄関に托鉢僧のかげろへり

玄関に侍る女将の美しき

清め塩置かれし玄関冴返る

玄関の葛蒲凛と客迎う

玄関の花に何時しか梅小枝

金谷 友江

大場 清

嶋田喜代子

河合富美枝

堀 菅子

中島富士子

中島 一子

佐藤 雅子

山本美代子

今井 恵子

料理

来客にごみ料理の厨かな

厨たつ夫の手料理とろろ汁

普茶料理の予約も春の旅はじめ

京料理春を彩る鯛の反り

春野菜摘んで料理の腕競う

遠い日の摘草料理母偲ぶ

料理長となりて住職御忌の寺

雛の料理宅配しますと広告紙

自由題

数珠廻す女ら集ふ弥生かな

扶養家族また一人抜けて絵馬の春

見上げれば枝に桜の蕾満つ

着ぶくれて青さの匂う夫婦船

冬つらら杖つく人の話好き

下萌えのベンチに眠る無精髭

立ち病みのいどころもなき杉花粉

月朧真砂女の通夜に急ぎけり

一木に鳥の眼殖ゆる寒の明け

桐生川沿ひに歩めば風みどり

流し難くるり廻って流れゆく

金谷 友江

嶋田喜代子

片桐てい女

河合富美枝

堀 菅子

中島 一子

佐藤 雅子

山本美代子

佐藤 雅子

山本美代子

今井 恵子

佐藤 まり

谷 しげ子

石原 新

嶋田喜代子

片桐てい女

河合富美枝

中島富士子

中島 一子

締切・五月二十日
発表・『浄土』二〇〇三年七月・八月合併号
選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

●葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下

さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

神山榮輝・林田康順・小村正孝



浄土宗の常識

全巻書影

戦国時代から江戸時代、法然上人は「念仏を専らにすれば必ず救われる」と説き、浄土宗を興へた。江戸時代には浄土宗の教えが広く普及し、浄土宗の教えが浄土宗の常識となった。浄土宗の常識とは、浄土宗の教えの基本的な考え方である。

浄土宗の常識

神山榮輝

林田康順

小村正孝共著

朱鷺書房 (1500 円＋税)

本誌の読者にはおなじみ、「響流十方」の連載を順番に担当して下さっている三人——浄土宗新進気鋭の若手三人組——すなわち、神山榮輝・林田康順・小村正孝の三師が書きおろした入門書である。

古代インド思想の潮流から仏教成立、その教えの説明（とてもわかりやすくまとまっています）から入って、釈尊と浄土教、そして浄土宗の開祖、法然上人の生涯とその教え、と流れるごとく展開する章立てや文脈のつながりの良さは絶妙。さすがのチーム・ワークである。

お念仏と日々の暮らし、という大事なステップを軽くひとつ踏んでから、第三章「仏事と作法」に入るところも心憎いほどの気配りで、安心感がある。

一般の信者が特に気にするであろう、葬儀各種法事、法要の意味と、その意味に順じる作法もわかりやすく整理されている。

そして四章では、私たちの日々の生活はいかにあるべきか、がいよいよ本格的に具体的に書かれ、仏壇、数珠、袈裟、焼香、墓といった仏教的日常性から、毎日の食事に至るまで必要にして充分な心配りがなされている。

最後に通仏教的な寺院行事、浄土宗寺院に特有な年間行事が記され、日常勤行式（日々のおつとめ）の差定も掲載されていて、いたれりつくせり。この一冊で浄土宗のすべてが理解できるように作られている。

まさに「浄土宗の常識」。

在家信者のみならず浄土宗教師が読んでも読みごたえのある快著である。

〔編集部〕

編集後記

どこかしら雲が漂う五月空 岱潤

米英軍によるイラク攻撃が一応の落ち着きを見せ、イラクを支配していた独裁者は姿を隠し、恐怖政治は終わったと報道は伝えている。そして今回の戦争の正当性が常識を持ち始めた。

もう六十年以上も前になるだろう、日本は西欧からのアジアの解放を叫び、植民地化されていた国々に軍を進めた。しかし結果は、それらの国々の独立がそれぞれかなう一方日本は敗戦し、逆に軍部が解体されてアメリカ的民主主義の世の中になった。戦後の復興と繁栄を敗戦のお蔭とするならば、アメリカ様々となることだろう。しかしそんなことを言う人は日本人にはいない。誰もが戦後の繁栄は、日本人自らの勤

勉さと努力の賜ものと考ええる。むしろ広島・長崎の原爆と東京を焼土と化した皆殺し作戦を忘れることは出来ない。戦争は敗戦を味わった国の人間にならない限り、その本質は認識できないのかもしれない。まして為政者にとつては政治を語るだけで、そこに生きる命を見ることはない。

浄土宗では二十一世紀を「人権と共生の世紀」と夢見た。人権と共生のキーワードは多文化の共有である。しかし今世界は、確実にその反対に進んでいると思えてならない。宗教者は必要さからだけでものごとを判断しないよう心がけるべきだ。

(長)

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎

編集顧問

大室了皓

浄土

六十九巻五月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十五年 四月二十日
発行 平成十五年 五月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八) 六九四七

FAX 〇三(三五七八) 七〇三六

振替 〇〇一八〇・八八二八七



昭和12年4月号



昭和12年7月号



昭和13年1月号



昭和13年3月号



昭和13年6月号



昭和13年7月号



昭和13年10月号



昭和14年1月号



昭和14年2月号



昭和14年4月号



昭和14年5月号



昭和14年7月号



昭和14年10月号



昭和14年12月号



昭和15年1月号



昭和15年2月号

法然上人鑽仰会の

本



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法話抄』
1,000円



『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より



当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会
電話 / 03-3578-6947
FAX / 03-3578-7036

月刊『浄土』
バックナンバー

